

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520609

研究課題名(和文) 口頭発表における質疑応答コミュニケーション能力の養成に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental Research on Developing Question-and-Answering Communication Skills in Oral Presentations

研究代表者

仁科 浩美(NISHINA, HIROMI)

山形大学・理工学研究科・准教授

研究者番号：10431644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：留学生及び日本人学生が行う口頭発表場面での質疑応答について、意識調査と会話データの分析からその特徴と課題を検討した。発表者が抱える困難点としては、質問意図が不明、あるいは未知語が表出した際の対応や、質問者への躊躇などが挙げられた。また、会話データの分析からは、会話の滞りから回復に向け、聞き返しによる発表者の積極的な態度が見られる反面、沈黙や言いよどみの場面では、質問者が全面的に主導する様子が見られた。発表者側が質疑応答をより能動的な時間とするためには、アサーティブなコミュニケーションの必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study examined the various characteristics and problems regarding speaker-questioner interaction in question-and-answer (Q&A) sessions of oral presentations by international students (L2 learners of Japanese) and Japanese students through surveys of consciousness and analysis of conversation data. Difficulties encountered by presenters included how to respond when unfamiliar jargon was used or the questioner's intension was incomprehensible and hesitation towards questioners. The Q&A session data showed positive attitudes from presenters when attempting to recover a halted conversation through reconfirming questions and comments; however, when the presenter was silent or repeatedly used fillers, the questioner would take full lead and try to recover the conversation. These results indicate the necessity of assertive communication by a presenter to produce more active time for Q&A sessions.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：アカデミック・ジャパニーズ 質疑応答 コミュニケーション能力 口頭発表

1. 研究開始当初の背景

公の場において自分の考えを複数の他者に伝える口頭発表、いわゆる「プレゼンテーション」は、学生・社会人を問わず、グローバル化と情報化が進む今日、ますます重要度が高まっているコミュニケーション活動である。大学での勉学や・研究においても口頭発表は、ゼミなどでの文献紹介、研究の進捗報告、卒業論文発表や学会発表等、目的や改まり度はさまざまだが、必須の活動である。理工系の外国人留学生の場合、発表を英語で行ってもかまわないとする傾向が高まる一方で、卒業後日本企業への就職を希望する学生においては、日本語による口頭発表能力や討論する能力等の日本語力が求められ、日本語でのプレゼン力を培う必要がある。口頭発表は、通常、発表とその後続く質疑応答から構成される。一般に発表そのものについては発表者から聴衆への一方向の発信であり、かつ、事前の練習が可能であるため、何度も練習を行うことにより、ある程度準備した上で臨むことができる。しかし、その後の質疑応答は、事前に想定問答を考えるとはいえ、実際にはその場で的確に質問をとらえ、即応力を持って回答する力が求められる。また、発表者と質問者との相互行為により、会話の一連の流れを作り上げる必要があるためか苦手とする者が多い。特に留学生の場合は、内容面への対応に加え、日本語の面でも注意を払わねばならず、日本人学生を上回る難しさは想像に難くない。

これまでの研究では、語学学習の中での討論場面や、研究室のゼミでの討論場면을対象に、コミュニケーションが停滞したとき、すなわち、コミュニケーション・ブレイクダウン(以下、CB)が発生したとき、どのように対応するのか、その原因はどこにあるのかなどの研究が行われてきた。しかし、ゼミなどからさらに改まり度が増す口頭発表の場を対象を広げ、質疑応答を扱った研究はまだほとんどない。また、発表者がどのような意識で臨んでいるのか、何を考えて発話したのかという点にまで踏み込んだ研究はまだない。

2. 研究の目的

本研究は、最終的に、発表者である学生がより有益な示唆、及び内省を得るための質疑応答のあり方についての教育方法の開発を目指すものである。今回の研究はその基礎研究となるものである。研究の目的は、アカデミックな口頭発表時の質疑応答コミュニケーションについてその問題点、及び、必要なコミュニケーション・ストラテジーなどを明らかにし、コミュニケーション能力養成のための基礎的資料を構築することにある。本研究では、日本人学生と留学生には共通する課題が多いものと推察し、両者を対象に研究を進める。その上で、それぞれ特有に捉えるべき留意点については個別に検討する。

3. 研究の方法

(1) 関連文献調査

関連する研究分野の先行研究について文献調査を行なった。対象としたのは、CBに関する研究、コミュニケーション・ストラテジーに関する研究、外国語を用いることに対する言語不安に関する研究、ダイアログに関する研究、発表活動に関する日本語指導の研究、そして、既に市販されている教科書調査である。

(2) 質疑応答の困難点に関する予備的調査

理工系大学院日本人学生 17 名に対し、各自の発表時の映像を視聴させた。刺激回想法に基づき、質疑応答時、聴衆からの質問を受けたとき、自分が回答するとき、何を考えながら行なっていたか、1 質疑ごとに尋ねた。協力者が語った質疑応答の困難点に関する発話内容を筆者が KJ 法により分類した。

(3) 口頭発表時の質疑応答に関する認識

口頭発表のデータを収集する課程に在籍する大学院生に意識調査を実施した。

PAC(Personal Attitude Construct 個人別態度構造)分析により課程途中の留学生 2 名への調査、課程修了時の留学生 2 名及び日本人学生 2 名への調査を実施した。

対象とした博士前期の学生より、課程が進んだ博士課程に在籍する日本人学生及び留学生への口頭発表に関してのグループ面接

日本人学生 250 名、留学生 17 名を対象として口頭発表の困難点に関する質問紙調査を実施した。

(4) 修士論文発表会の発表・質疑応答データ収集及び分析。2014 年 2 月までに 13 名の留学生及び 19 名の日本人学生の同意を得、発表時の録音・録画データを収集した。さらに、本人らの協力を得、発表時のビデオ視聴を介した刺激回想法により発話時の思考や行動についても調査を行った。録音・録画データは文字化した。分析の際は、非言語行動にも注目した。質疑応答の際に、沈黙、言いよどみ、聞き返し等が発生し、会話が円滑に進まなくなった部分を CB が発生した部分と判断し、一連の発話の連鎖を分析した。

4. 研究成果

(1) 関連文献調査

調査の結果、発表そのもののスキルを学習する教材は既に多くあるが、ディスカッションや質疑応答に関して実際の場面を投影したて作成された教材は少ない。コミュニケーションが滞ったとき、どのように「修復」するか、前向きな方向からの検討はあまりなされていないことがわかった。

(2) 質疑応答の困難点に関する予備的調査

協力者が語った発話に現れた質疑応答時

の困難点は、情報の相互作用、機器操作、心理面の3つに大別された。

情報の受信と発信に関する要因

- ・受信に関しては以下の項目が挙げられた。
 - a. キーワードへの過敏な反応・過去の関連する質問を想起による誤解や勘違い
 - b. 発表者にとって未知の言葉を質問者が用いたことによる困惑・
 - c. 話題に対する理解や認識に質問者とのズレがあることへの困惑
 - ・発信に関しては以下の項目が挙げられた。
 - d. 質問者の意図を十分に理解できぬままの不明確な発信
 - e. 簡潔にまとめられない説明
- 機器の操作に関する要因：「スライドが重くて、見せるのに時間がかかった」等
心理面に起因する身体的な要因：「詰まるところが多かった」、「緊張してしゃべれなかった」等

(3) 口頭発表時の質疑応答に関する認識

PAC分析による調査

a. 博士前期課程1/2終了の留学生2名への調査：専門分野での口頭発表の質疑応答に対する困難点について、その意識・態度をPAC分析により検討した。その結果、普段から日本人学生と共に研究活動を行っている留学生Aについては、質疑応答の意義もよく理解し、積極的に研究に取り組んでいる。しかし、その場合でも回答に用いる日本語は、誤解を恐れる気持ちから研究室での誰かの発話をそのまま用いており、自分の言葉で自由に説明を行なうことはしていないことがわかった。一方、留学生Bについては、日常会話レベルの日本語からアカデミックな日本語使用への移行に苦慮し、自己を卑下する気持ちと、いつか学外でも日本語で発表を行えるよう励もうとする気持ちとの葛藤が見られた。協力者それぞれが異なるレベルの課題を抱えていることがわかった。

b. 課程修了直前の留学生2名と日本人学生2名への調査：同じ外国人留学生でも、意識・態度には多様性が見られ、日本語に関わる要因と専門の内容に関わる要因とを日本滞在の時間経過とともに段階的に切り離して捉えている事例や、回答の誤りに気がついたり、適切な回答ができないと判断すると、反論や質問の複雑化を恐れ、対話を「あきらめ」、切り上げる態度を示す事例などが見られた。日本人学生と留学生の両方が共通して、質問者である教員を意識し、遠慮・躊躇したりする点と、わかりやすい説明を行なうことの難しさを挙げた点で共通するものがあった。他方、留学生独自の特徴としては、日本語力の不足や、動転に伴う日本語の忘却や方言の聞き取りへの対応力等、日本語に関する意識が強い点と、研究に対する社会的関与への意識が日本人学生よりも低い点が挙げられた。

理工系博士後期課程学生へのグループ面接調査：博士後期課程に在籍する日本人学生5名、及び、留学生3名それぞれのグループに対し、質疑応答を含む口頭発表に関するグループインタビューを行った。その結果、口頭発表は、他者から助言が得られ、異なる視点から考える契機となり有益であると捉えている点や、簡潔でない質問や内容が外れている質問への対応に苦慮するという点において、日本人学生及び留学生に共通点が見られた。一方、日本人学生の特徴としては、学内と学外の発表に対する質的な違いの認識や、企業と自身の研究とのつながりへの気づき、目上の者からの質問であってもその真偽を冷静に見定めようとする姿勢の表れ等が見られた。これに対し、留学生の場合は、言語面での対応の難しさに関心があることが大きな特徴と言える。特に、初対面の質問者の質問を正確に把握するための聞き取りとその対応に難しさを感じており、的確な回答、説明を行うためにも質問者に対し要点を明確にした質問を求めていることがわかった。

口頭発表の困難点に関する質問紙調査

質疑応答時における困難点について6件法で質問：回答の平均値が4.5以上の項目は、日本人学生が「質問者が何を聞きたいのかわからないとき」「自分の知らない用語を相手が使ったとき」「想定外の質問が来たとき」と質問を受ける際の項目が挙げられていた。留学生の場合もこれらの項目は4.0を超える数値であり、両者とも同様の課題を抱えていることが示唆された。しかし、留学生がより高い数値を示したのは「伝えたいことがうまく表現できない」「キーワードに反応して勘違いして答えた」といった回答の際の項目であり、産出にも課題があることをうかがわせた。

(4) 修士論文発表会の発表・質疑応答データ分析

質疑応答の発話連鎖パターン

口頭発表時の質疑応答における質問者と発表者との基本的な発話連鎖は、<質問 回答 了解>という構造から成り立っていることがわかる。これは、教室活動に見られる(IRF/E構造)<質問-回答-フィードバック/評価>や、インタビュー調査での<質問 回答 受領>と類似しているものの、最後の連鎖に違いが確認できる。これは、質問者と回答者の関係や知識の既有意度の違いがあることから生じるものと考えられる。

コミュニケーション・ブレイクダウン 修復 回復

質疑応答時の聞き返し、沈黙、言いよどみなどをCBの指標とし、どのように会話を修復し、質疑応答を相互に作り上げ、終結させるのか、その過程を分析した。

a. 発表者からの聞き返し

「聞き返し」には、「ここですか」「こちら

のアイソレーター？」といった類の Yes-No の 2 択で端的に質問し、回答を求める聞き返しと、「すみませんが、もう一度お願いします」のように再度質問全体についての説明を要求する聞き返しが見られた。Yes-No での聞き返しは、質問者の質問に対する対象が複数ある場合、それを特定するために、発表者が質問者に聞き返しているという図式になっている。ゆえに、聞き返しによって質問の対象物が明確になれば、次の回答はすぐに提示でき、比較的短時間で元の会話に回復する。CB と見た場合、これは会話の本流から外れてしまうことになるが、意味不明である部分を明確にさせ、比較的容易に本流に戻ることができるという点からすると、この聞き返しは確認の機能を果たしており、有効なストラテジーであると言える。

「すみません、もう一度お願いします」の類は、日本人学生 19 名中 0 件、留学生 13 名の質疑応答の中でも 3 例しか現れず、明示的な再発話要求は実際には頻出してはいない。

b. 発表者の沈黙

沈黙は、10 秒以上になることもある比較的長い沈黙と、2、3 秒程度の沈黙とに分かれる。前者は質問された内容に該当するスライドを探そうとする際に起こる沈黙である。視覚的に発表者が何をしようとしているのかを理解できるため、CB は停滞のまま進がスライドの準備が整えば、会話は回復する。後者は答えそのものやどのように答えるかを考えているときに起こることが多い。

c. 発表者の言いよどみ

「どんな物体でも起こるのか」と絶対か否かを迫られたり、記憶が不確かだったりしたときに言いよどみが見られた。多くの場合、質問者がより具体的な質問に言い換えたり、例示をしたりすることで会話が回復される。

d. 質問者からの発話の遮り

発表者が話している途中で、あるいは、話し出したところで、質問者が発話を開始する現象が見られた。明示的に「いいや、そうじゃなくて、」といった発表者の回答が不相当であることを示す場合もある一方で、質問者の急な話題転換や、割り込みといったケースも確認された。この場合、遮りにより、それまでの話題は途中で途切れる結果となる。

e. 複数連続 CB

一つの質疑応答の中に、「沈黙+言いよどみ」「沈黙+聞き返し」のように 2 種類の CB が連続して発生する場合がある。

f. その他

不十分な CB、または、CB が起こらないことにより、質問者と発表者の質疑応答はズレが発生したまま終結する。

CB の発生なしに質疑応答が行われることが理想ではあるが、知識の量・質が異なる関係では、意味や発話意図の確認が必要となる場面もある。聞き返しなどは CB としてよりもむしろ積極的なストラテジーとして効果的に使用することを考える必要がある。さら

に、アサーティブなコミュニケーション指導の必要性についても示唆が得られた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

仁科浩美「理工系博士後期課程の学生は口頭発表をどのように捉えているか—留学生と日本人学生へのグループインタビューから—」, アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル, (5) 38-45, (2013) 査読無

<http://www.academicjapanese.org/journal05.html>

仁科浩美「日本語による口頭発表時の質疑応答に対する留学生の意識と態度—修士課程を 1 年経過した留学生の事例から—」, 小出記念日本語教育研究会論文集, (21) 31-44, (2013) 査読有

仁科浩美「口頭発表時の質疑応答に対する理工系留学生の意識と態度—日本人学生との比較を通じた質的分析—」, 山形大学紀要(教育科学), 15(4) 75-92, (2013) 査読有

[学会発表](計 3 件)

仁科浩美「理工系留学生の質疑応答場面におけるコミュニケーション・ブレイクダウンからの回復」シドニー日本語教育国際研究大会 2014 年 7 月 10 日~12 日, シドニー工科大学(オーストラリア)

仁科浩美「口頭発表の質疑応答において無音声時には何が行われているか—理工系分野の留学生を対象に—」日本語教育方法研究会第 41 回研究会, 国内会議, 2013 年 09 月 21 日, 立命館アジア太平洋大学(大分)

仁科浩美「日本人学生が口頭発表の質疑応答において感じる困難点—刺激回想法を用いた日本人大学院生への調査—」, 日本語教育国際研究大会 名古屋 2012, 国際会議, 2012 年 8 月 18 日, 名古屋

6. 研究組織

(1) 研究代表者

仁科 浩美 (NISHINA, Hiromi)
山形大学・大学院理工学研究科・准教授
研究者番号: 10431644

(2) 連携研究者

安原 薫 (YASUHARA, Kaoru)
山形大学・大学院理工学研究科・助教
研究者番号: 60375318

鎌田 美千子 (KAMADA, Michiko)
宇都宮大学・留学生・国際交流センター・准教授
研究者番号: 40372346